本の植樹記念碑がありました。半世紀も前のこと、小学校、女学校の春の遠足は此処より花のトンネルを虫掛橋まで歩きましたが、今は桜も疎らに却って筑波連山の視界が広がっていました。

堤行き　ゆくてや筑波　夏の雲

筑波への　真直ぐの堤　行々子

立田辺りの水田は宅地造成で半ば埋立てられ。

雪解けの　田ごとに紫山　つくば影

白鷺の　翔つや田毎に　山の影。

旧作の俳句の風景は失われていました。

虫掛のバス停で土浦ゆきの車を待ちながら。

葦の角　蔭に四つ手の　小屋朽ちて。

葭原を　見えつ隠くれつ　バス来る。

これで二時間足らずの道程を終えました。常陸風土記のころよりの筑波。謡曲、狂言の桜川と古来人々に親しまれた風景は今も変らず真菰。葭の風と。川原鶸、葭切り、蛙の鳴き声に送られ、自然の恵みに歓を尽し得た心地で帰途につきました。桜川は、余暇を、休日を家族連れで行楽をいたしますのに、よろしい処でございます。

私の住んだ町々

三田のぶ子

いまから十三年前、私は生れてからずっと住みつづけてきた東京から神戸の舞子というところに転居した。その頃は、まだ今のように公害で自然があらされるということの比較的少かった時代である。

舞子は源平の昔、須磨、明石とならんで歌にうたわれた風光明美なところであった。しかし、もちろん昔のままではない。海の北側に松山が切りくずされて、五〇〇戸の公団住宅が建った。私たちの住んだのはここである。